

時間の推移に伴う属性変化における程度限定

— 三つのタイプの程度副詞について —

渡 辺 史 央

はじめに

本来、いわゆる程度副詞のもつ働きとは、状態・性質あるいは程度量などの属性を表す語に先行し、その属性の程度の度合いを限定することである。一言で「属性」と言っても限定対象となるのは、形容(動)詞、一部の名詞、変化性・程度性動詞とさまざま、量・方向性、一時的状態も含めた広義のものとして捉えることができる。ここでは、特に形容(動)詞と「形容(動)詞～なる」の形をもったものを対象とし、程度副詞の時間の推移における事態(コトガラ)への程度限定に光を当てた考察を行いたいと思う。たとえば、「お腹が大きい」という表現は、ビール腹で「大きい」場合や、食べ過ぎて「大きい」といった、日常的、一回性の一時的な状態についての属性を述べる場合もあれば、妊婦のお腹が「大きい」といった時間の経過とともに進行し、いずれは到達する程度の極限や限界が前提となった程度段階を述べる場合もある。本稿は、最後に見るような時間の推移・進行に伴う属性変化と程度副詞の関係について述べようとするものである。

1. 程度副詞の分類方法

これまで工藤(1983)や渡辺実(1990)において、程度副詞の構文的あるいは意味特徴から体系的な分類が試みられている。本稿でも、渡辺(1990)で行われたのと同様の構文テストに基づき、以下のように分類し、考察をすすめる。

- 「Xは～Z」の「～」に挿入可能、かつ比較構文「XはYより～Z」に挿入不可能
「とても、大変、非常に」……Ⅰタイプ(渡辺(1990)の「発見系」の「とても類」)
- 「Xは～Z」の「～」に挿入可能、かつ「XはYより～Z」にも可能
「だいぶ、かなり、ずいぶん、相当、幾分、やや、少し、ちょっと」……Ⅱタイプ(注1)
(渡辺(1990)の「比較系」の「多少類」)
- XはYより～Z」にのみ挿入可能であり、「Xは～Z」には挿入不可能
「ずっと、もっと、いっそう、さらに、はるかに、もう少し」……Ⅲタイプ(渡辺(1990)
の「比較系」の「もっと類」)

2. 時に関する副詞「もう／まだ」との関係

2-1 時間の推移に関する表現と属性の程度の限界性

「大きい」という形容詞を例にとって以下の例を見る。

- (1) (食べ過ぎで) お腹が大きい
- (2) (妊娠中で) お腹が大きい

食べ過ぎでお腹が大きい状態はあくまで一時的なもので、＜大きさ＞の程度にとくに極限の程度の存在を前提とした表現ではないが、妊娠してお腹が大きい場合は、臨月でのお腹の＜大きさ＞が極限の程度段階として前提されている。つまりこの場合の「大きい」は極限の程度（限界性）を有することを前提とした程度の尺度上における過程段階として捉えられている。なお「*」は非文であることを表す。

- (3) * (食べ過ぎで) お腹がもう大きい
- (4) (妊娠8か月目で) お腹がもう大きい

金水(2000)によると、「もう／まだ」が用いられるのは、時間の進展と共に推移・移行する状態を前提とされていることが必要である。さらに、発話に先立ってその推移の段階についての「想定」と発話によって「主張」される段階が食い違いを見せ、想定よりも主張が遅れている場合には「まだ」が進んでいる場合には「もう」が用いられる。そのことを照らして考えると、(2)の「大きい」が「もう」と共起できるのは、時間の進展とともに程度の度合いが推移することを前提とした表現であるためであり、(1)はあくまで一回性で偶発的な一時的状態を指し、時間の推移に伴う程度変化を前提としないため、「もう」との共起を可能としないと言える。次に程度副詞との共起関係について見る。

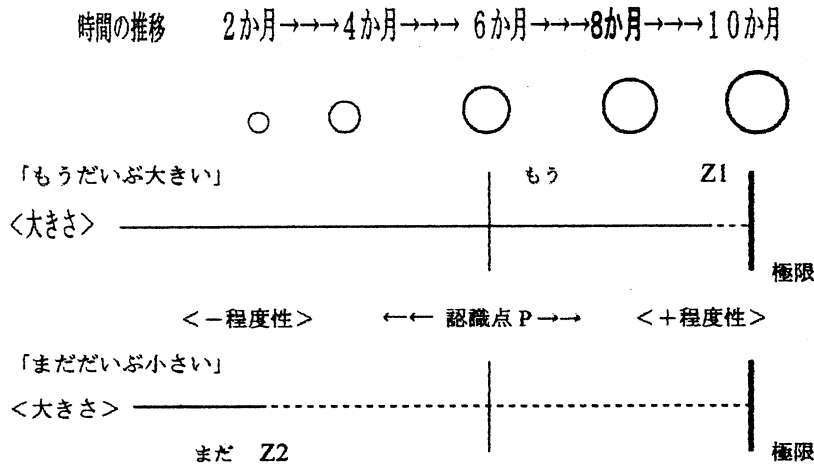
2-2 程度副詞との共起関係

Ⅱタイプ「だいぶ／ずいぶん／かなり」との共起関係について見る。

- (5) 【妊婦のお腹を見て】 もう {だいぶ／ずいぶん／かなり} 大きいよ。
- (6) まだ {だいぶ／ずいぶん／かなり} 小さいよ。
- (7) 【東京までの400キロの道のりの途中100キロ地点】
ここから東京まではまだ {だいぶ／ずいぶん／かなり} 遠い。
- (8) 【日暮れ時】 もう {だいぶ／ずいぶん／かなり} 暗い。

(5)では、到達点、つまり極限の程度は臨月の大きくなった状態のお腹であり、その極限の程度の度合いに近づいた状態であることを表す。(7)でも同様に、到達点が東京であり、現地点と東京までの距離の程度が大きいことを表し、(8)では、日が沈みきった状態が極限であり、わずかな時間で極限の状態に到達することが表されている。森田(1989)は、「もう／まだ」の意味について、「事柄が基準点を超してさらに進展し、話し手側に接近しているか、いないかという判断」であり、「事柄が話し手の所にまで達する期間を考える意識である」(p1128)としている。そして、基準点を越えていれば「もう」

が、基準点を越えていなければ「まだ」が用いられる。森田のいう「基準点」とは、ここでは、話し手が属性<Z>の程度の尺度において、「Zである」と認める点として捉え、「認識点」としておく。下は、森田（1989）の図式を参考に、時間の推移と話し手の心理的な程度の段階の変化との関係をより詳しく図式化したものである。（注3）



妊娠2か月のまだお腹が目立たない状態から、時間の経過とともに徐々に<お腹の大きさ>の程度が高まり、最後に到達するのは10か月目の状態である。ここで言う「認識点」とは、話し手が意識の中で妊婦のお腹の大きさについて「大きい」と認識する程度の尺度上における段階（P）である。したがって、認識点に至って初めて「大きい」と言えるのであり、認識点以前の段階では「小さい」という表現がなされるであろう。便宜上だいたい6か月程度の状態を示しておいたが、これは時間の推移とは必ずしも一致するものではなく、あくまで話し手の主観的な認識とも言える。「もうだいたい」が示すのは、現実（発話時）において、妊婦のお腹の<大きさ>の程度の度合い（Z1）が、話し手の認識点 P を超えるところに位置し、しかも到達点（極限）までの程度の差がわずかであることを示し、一方、「まだだいたい」は、発話時での程度の度合い（Z2）が話し手の認識点 P を超えておらず（つまり、Z2 の段階にとどまっており）、さらに極限までの差が非常に大であることを示していると説明できる。「もうだいたい」における「だいたい」は、程度の尺度上において、現実（発話時）の程度から極限まで差がごくわずかであることを示すのと同時に、<大きさ>の度合いが<-程度性>から<+程度性>に変わる点（認識点 P）からの距離が大であることも表している。また、「まだだいたい」においては、程度の尺度上における発話時の段階 Z2 が、極限までほど遠いことを表し、それを強調していると言える。さらに、他のタイプの程度副詞についても同じ文脈において見る。

「とても／大変／非常に」（Iタイプ）

(9) *お腹はもう { とても / 大変 / 非常に } 大きいよ。

(10) *ここから東京まではまだ { とても / 大変 / 非常に } 遠い。

(11) 【日暮れ時】 *もう { とても / 大変 / 非常に } 暗い。

「もっと／ずっと」(Ⅲタイプ)

(12) お腹はもう { *もっと / ?ずっと } 大きいよ。

(13) 東京まではまだ { ?もっと / ??ずっと } 遠い。

(14) 【日暮れ時】 もう { *もっと / *ずっと } 暗い。

2-3 Iタイプの程度副詞「とても」の類が「もう／まだ」と共起できないわけ

「とても」の類が「もう」や「まだ」と共起できないのは、これらが時間的な進展とともに変化するコトガラとは馴染みにくいことにその原因がある。たとえば、「日が暮れる」「東京に近づく」といった時間の推移とともに程度性が変化するような述語動詞とは馴染まないのである。(「*とても / *大変 日が暮れる」「*とても / *大変 東京に近づく」)(注3)

また、この図式は、実は比較表現の構造と通ずるものがある。比較表現とは、ある属性Zについて、程度の尺度上におけるある点(Y)を基準として、それとの相対関係から別の対象(X)の程度の度合いが限定されることを表す表現である(「XはYよりZ」)。上に見た「もう／まだ」の図式は、時間の流れの中でのあるコトガラについて、話し手の認識にある属性の程度変化の段階(認識点)と、現実(発話時)の程度の段階との尺度上における関係を述べるものであり、「二つの対象の相対的關係から程度限定がなされる」という意味において比較表現と共通するのである。「*XはYよりとても大きい」といったように「とても」が比較による程度限定を行えず、単に主体の属性の程度に言及する形でしか程度限定を行えないといった事実を見ても上の結果は説明できるであろう。

2-4 Ⅲタイプの程度副詞「もっと」と「ずっと」

「もっと／ずっと」は「とても」とは異なり、比較表現に表れ、常に相対的範囲限定を行う程度副詞である。(注4) さきほどの文に比較の基準が文脈上明らかになるような操作をすると、幾分、文に自然さが出る。

(15) お腹は先月会ったときよりももっと大きいよ。

(16) A: なかなか東京に着かないね。あとどのくらいかかるの?

B: (あなたが考えているより) 東京まではまだもっと遠いよ。

上の文は動的な状態述語を用いて「もっと大きくなった」や、時間量を表す表現「まだもっと時間がかかる」などを用いるとさらに自然さを増す。「ずっと」は「私たちの泊まるホテルはまだずっと先だ」「まだずっと遠い」などのように、「まだ」との相性も悪くない。ところが、仮に比較の基準を明示しても「*先月よりももっと大きい」「*(あなたが思うより) もっと遠い」のように、「もう」と「もっと」の相性は今ひとつの

ようである。

「さらに／いっそう」についても見てみると、「もっと」と同様に「まださらに／いっそう遠い」とは言えるが、「*もうさらに／*もういっそう遠い」とは言えない。「もっと／さらに／いっそう」は比較性程度副詞の中でも「程度の高いもの（あるいは低いもの）を基準にして、それより高い段階（低い段階）に程度を限定する」、いわゆる「累加性」を併せ持つものである。つまり、程度の尺度上において、<+程度性>→<++程度性>へ、あるいは<-程度性>→<--程度性>への限定である。上に見た共起関係をまとめると以下ようになる。

	Iタイプ	IIタイプ	IIIタイプ
もう	×	○	○ずっと ×もっと／さらに／もう少し
まだ	×	○	○

3. 条件節にみる程度副詞の共起

一部の程度副詞が条件表現において現れにくいことは、これまでも指摘されている。

- (17) * {とても／大変} 明るくなったら、出発しよう。
 (18) *もし、ずいぶん暑かったら、クーラーをつけてください。
 (19) * {だいぶ／ずいぶん／かなり} 優しいなら、離婚しないで済むのに。

この理由については、程度副詞のもつ「評価性」と関係づけた見方、つまり、未来を表す表現や現実に起こらなかったような未実現・未確認のことがらについては、評価は下し得ず、したがってそこに現れる属性の程度限定は行えないといった見方が強い。(註5) 本稿では、益岡(2002)にしたがって、条件表現を「主節(後件)」で表される事態の成立が条件節(前件)で表される事態の成立に依存し、かつ前件と後件がいずれも非現実の事態を表すもの」とし、時間の経過とともに実現することが前提とされる第1番目のような文において、さきほど分類した三つのタイプの程度副詞との共起関係について見る。(註6)

3-1 時間の経過とともに成立する事態が条件となる場合の共起関係

- (20) (病気が) よくなれば、自由に外に出られるよ。
 (21) 【夜明けを待つ場面で】 明るくなったら、出発しよう。
 (22) 【真冬に】 暖かくなると、桜が咲くよ。
 (23) 【小さいこどもに向かって】 大きくなったら、何になりたい？

これらの「良くなる」「明るくなる」「暖かくなる」「大きくなる」に表される「良い」「明るい」「暖かい」「大きい」は時間の推移・進行に伴い、その表される属性の程度の度合いが変化し、いずれは尺度上において極限の程度に到達することを前提としている。

つまり程度の段階において限界性を有するものである。たとえば、〈明るさ〉においては、夜が明けて日が昇りきった状態が、〈良さ〉では、療養したのち、病気が治って健康になった状態がその極限の程度である。そして、このタイプの条件表現は、前件に現れる事態が一定の時間ののちに成立することを、実現する前の段階で先取って捉え、後件の事態の遂行が前件の成立時に行われることを述べた表現である。(注7) 程度副詞との共起関係は以下のようになる。

I タイプ

(24) {*とても / *大変 / *非常に} 良くなれば、自由に外に出られるよ。

(25) {*とても / *大変 / *非常に} 明るくなったら、出発しよう。

(26) {*とても / *大変 / *非常に} 暖かくなると、桜が咲くよ。

II タイプ

(27) 病気が {??かなり / ?だいぶ / ??ずいぶん / ??少し} 良くなれば、自由に外に出られるよ。

(28) {??かなり / ?だいぶ / *ずいぶん / ??少し} 明るくなったら、出発しよう。

(29) {?かなり / ?だいぶ / *ずいぶん / ??少し} 暖かくなると、桜が咲くよ。

III タイプ

(30) {もっと / もう少し} 良くなれば、自由に外に出られるよ。

(31) {もっと / もう少し} 明るくなったら、出発しよう。

(32) {もっと / もう少し} 暖かくなると、桜が咲くよ。

まず、Iタイプの「とても」の類が上の文に現れないのは、さきほど「もう／まだ」のところで見たようにこの類の程度副詞が時間の進行とともに変化・進展するコトガラとは馴染みにくく、したがって時間の推移過程での属性への程度限定を行えないためである。

「*とても / *大変 明るくなったら出発しよう」のように既の実現したこと踏まえた理由を表す節においても不自然さを感じる。一方、IIタイプについては、理由節では、「だいぶ / かなり / ずいぶん 明るくなったら出発しよう」のように言えるのに、上に見たように条件節においては、現れることが不可能か、あるいは不自然である。IIIタイプの「もっと / もう少し」については、全く不自然さを感じない。

3-2 程度の尺度上における二つの前提

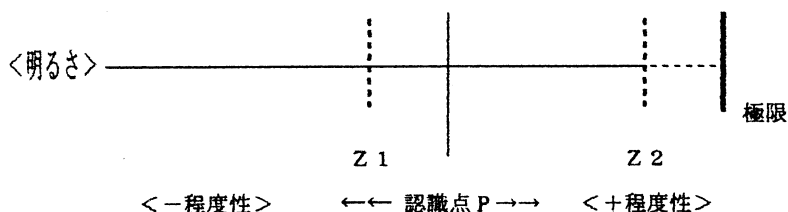
先に見た「明るくなったら」には二通りの意味がある。一つは、〈明るさ〉において極限状態に達した状態を前提にしている場合であり、もう一つは、発話時の〈明るさ〉を基準としてその程度よりも高い段階に達したということを前提にしている場合である。「だいぶ / かなり」は前件で示される事態が極限に達していない状態「(まだ十分に明るくない今より) だいぶ 明るくなったら」の意味合いにおいてはほぼ共起可能となるが、完全に極限状態に達した事態(完全に明るくなった状態)を前提とした意味では共起が不可能で

ある。一方、「ずいぶん」は比較の基準を明示した場合でも文のすわりが悪い（「*今よりずいぶん明るくなったら」）。「ずいぶん」は「ずいぶん真っ赤な夕焼けだなあ」「ずいぶん極端な話だ」のように、極限の程度状態を表す語に先行することができる。いわば評価性を強く持ち、[真っ赤である]コトへの評価を下す語であるとも言える。IIタイプのうち、「なかなか」「結構」「案外」などの語が評価性の強い副詞として挙げられるが、これらが属性の進行・推移といった側面について程度限定を行えないことは興味深い現象である。時間の推移と程度変化について図式的に示すと以下のようになる。

「だいぶ明るくなったら出発しよう」

(発話時)

時間の推移 0時→→→2時→→→3時→→→4時→→→5時→→→6時→→



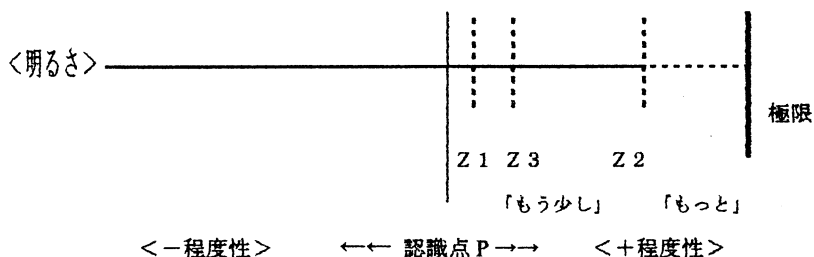
発話時（午前3時）の<明るさ>がZ 1、「出発する」という事態の遂行時における<明るさ>はZ 2であり、程度の尺度上、Z 2 > Z 1の関係が成り立ち、しかもZ 2は極限の状態にごく近い程度段階であることを示している。

「もっと」や「もう少し」が用いられた場合は、話し手の意識の中には「今の明るさ」「今の健康状態」が前提とされていて、それよりも程度の度合いが大きい段階を条件としていると言える。したがって、「もっと/もう少し」は「(発話時)よりも」といった比較の意味において共起可能となる。

「もっと/もう少し 明るくなったら出発しよう」

(発話時)

時間の推移 0時→→→2時→→→3時→→→4時半→→→5時→→→6時→→



「もっと」の場合は、発話時の明るさ（Z 1）を基準にして後件の事態遂行時の明るさ（Z 2）の程度の段階がそれより高い位置に位置づけられ、<Z 2 - Z 1>の程度差が大

であることを示している。一方、「もう少し」の場合は、発話時の明るさ（Z1）を基準にして、後件の事態遂行時における明るさ（Z3）が位置づけられ、 $\langle Z3 - Z1 \rangle$ の程度差は小である。ここで、気を付けなければならないのは、両者とも、発話時での「明るさ」が認識点（話し手が「明るい」と認識する程度）を越えているということである。つまり、真っ暗な状態（話し手が「明るい」と認識していない状態）では、「もっと／もう少し」は使えないのである。次の例で確認する。

(33) A：真っ暗だね。なかなか明るくならないね。

B：そうだね。{*もっと／*もう少し} 明るくなったら出発しよう。

(34) A：ぼちぼち明るくなってきたようだね。

B：そうだね。{*もっと／*もう少し} 明るくなったら出発しよう。

Ⅲタイプの程度副詞が $\langle +$ 程度性 \rangle を前提としていることは、Ⅱタイプに属する時間量あるいは程度量を表す「少し」と比較した以下の文においても明らかである。

(35) (問題用紙を配りながら) この問題は簡単だから少し考えたら解けますよ。

*もう少し

(36) A：先生、この問題、難しくて解けません。

B：大丈夫ですよ。もう少し考えたら解けますよ。

*少し

上で見た(23)のように、前件が極限程度のみを意味する場合は、すべての程度副詞は共起不可能である。

(37) {*かなり／*だいぶ／*ずいぶん／*少し} 大きくなったら何になりたい？

(38) {*とても／*大変}

(39) {*もっと／*もう少し}

(37)~(39)の例では「大きくなったら」は「成人したら」の意味で、すでに程度の極限に達していることが前提とされていて、程度の度合いの推移の過程状態を意味する余地がないためである。つまり程度限定の機能をもはや持ち得ないためである。

3-3 「ずっと」について

Ⅲタイプの「ずっと」については、紙幅の関係上、ここでは簡単に触れるにとどめておきたいと思う。「*ずっと明るくなったら出発しよう。」「*ずっと良くなれば自由に外に出られるよ。」は比較の基準を明示しても、「もっと／もう少し」と比べると文に不自然さが残る（「??今よりずっと明るくなったら」「??今よりずっと良くなれば」）。これは「ずっと」がもつ比較性の機能が、単に二つの対象の属性についてその大小関係を述べることにとどまっており、発話時の程度の段階が不十分であることを認識した上で、十分な程度（あるいは後件の事態が起こりえるために必要な程度）の状態の実現を前提とした条件表現には馴染みにくいのだと言える。「ずっと」が「もっと」や「もう少し」と異なり、「*ずっ

と大きな声で話せ」などと命令表現に馴染まないのも、命令表現が発話時での程度の度合いよりも高いレベルの程度の状態を要求するといった点で条件表現と共通しているためであると思われる。下に、3の結果をまとめておく。

	Iタイプ	IIタイプ	IIIタイプ
極限状態が条件	×	×	×
変化の段階が条件	×	○だいぶ △かなり ×ずいぶん	○もっと／さらに／も う少し ×ずっと

4. 本稿のまとめ

以上、時間的推移における属性程度について比較表現を構文テストに用いて分類した三つのタイプの程度副詞がそれぞれどのように程度限定を行えるかについて見てきた。「もう／まだ」の図式は、二つの対象の相対的關係を捉える比較表現の図式と通ずるところがある。つまり、「もう／まだ」は時間の流れにおいてある事態について、それがどの位置に存するのかを、話し手の認識（前提）と現実との相関の中で捉えるものである。したがって、比較構文に立てないIタイプの程度副詞は、時間の推移に伴うコトガラとは馴染みにくく、「もう／まだ」との共起も可能にしないのだと言える。さらに、条件表現においては、前件の程度状態が発話時との比較の上で限定される場合でのみII、IIIタイプの程度副詞は共起を可能としたが、Iタイプは可能としなかった。これも同様にこれらが二つの対象との相関から程度限定を行うことができないためである。また、「もっと」など「累加性」をもつものは、時間の推移に伴う属性程度推移において、発話時での程度段階が話し手の基準より遅れている場合の「まだ」との共起は可能であるが、基準よりも進んでいる場合の「もう」との共起はできないことも明らかとなった。さらに、「ずいぶん」については、他のIIタイプのものとは異なる振る舞いを見せ、より「評価性」の濃い様相を呈している。比較性、累加性、評価性が、事態のアスペクト的側面や実現・未実現といったことにどのように関わっているのか、各々について程度性をめぐった前提と現実の相関はどのような構造であるのか、今後はさらなる検討の余地があるであろう。

【注】

注1) 「ずいぶん」は渡辺実(1990)では発見系に分類されているが、比較構文にも現れることからここではIIタイプに入れておく。なお、渡辺実氏の「結構類」における「結構／なかなか／わりに／やけに」等は、比較構文にも立つ場合は「思ったよりなかなかいいね」「見た目よりわりとおいしい」などのように、同一主体の属性における比較を述べる表現が多く、「評価性」との関わりが強いタイプである。IIタイプに入ると思われるが、今回は考察対象としない。

注2) 森田(1989)が挙げた「もう/まだ」の用法のうち、第二種の意味用法に当たると考える。森田氏は他にも以下の用法について言及している。

①事柄がすでに基準点を越えてしまったか否かの判断。そこから完了・非完了の意識が生まれる。例：仕事はもう済んだ/まだ終わらない。

②-1 事柄が基準点に達したのに、そのうえ、さらに事柄を加えていく(プラスアルファの意識)例：もう一つください。

②-2 基準点に達するには、さらに事柄を加える余地がある。

例：これからまだまだ寒くなる。

③事柄が基準点に達していないため、不十分・不満足な状態ではあるが、他と比較すればこのほうがより基準点に近い(もしくは遠い)という判断。

例：あんな学校に行くくらいなら浪人した方がまだいい。

注3) 佐野(1998)は、は主体変化動詞のうち、進展性の持つ動詞における「限界性」に着目し、程度副詞との共起関係について興味深い考察を行っている。「とても」の類については、「日が暮れる」「氷が溶ける」など、進展性のある動詞で限界性を持つ動詞との共起ができないことも指摘している。

注4) なお、渡辺史央(1996)では「比較性」という観点から同様の構文的特徴より三分類し、「もっと」の類は最も比較性を強くもつもので「比較性程度副詞」とし、考察を行った。

注5) 渡辺実(1990)、工藤(2000)参照。

注6) 益岡(2002)では「夏休みになったら泳ぎに行こう」が例として挙げられている。これは、一定の時間が経てば「夏休みになる」ということが了解されていて、当該事態を現実を実現する以前の段階で捉えた表現である。なおこのような条件表現で扱われる事態は通常は動的事態に限定されるとしている。なお、他の条件表現について、程度副詞との関係についての考察は別稿に譲る。

注7) 益岡(2002)は、「現実化以前の事態を表す用法」としている。

【参考文献】

- 金水敏(2000)「時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』渡辺実編 明治書院
工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
佐野由紀子(1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学3』国立国語研究所
益岡隆志(2002)「複文各論」『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『国文学論集23号』上智大学国文学会
渡辺史央(1996)「比較性程度副詞「ずっと」「さらに」「もっと」の一考察—比較の基準と程度の認識をめぐって」神戸市外国語大学修士論文